
モブキャラ君とオリ主君

2Pカラー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モブキャラ君とオリ主君

【Nコード】

N4666U

【作者名】

2Pカラー

【あらすじ】

主人公はアンチ系オリ主、ではなく、そんなオリ主君に色々言われるモブキャラ君。桜通りの吸血鬼事件について持論を展開するオリ主君に、元々ネギま世界の住人であるモブキャラ君が反論(?)します。そんなお話

（前書き）

ある感想に悶々とし、ある作品を久しぶりに読み返してムラムラし、そんな感じで気づいたら出来てました。

一部、アンチ作品に対してケンカ売ってるように捉えられる描写になってるかもしれませんが、そんなつもりはありませんゆえ、どうかご容赦を

「だから！ 何故貴様らは揃いも揃って思考を放棄するのだ！ エヴァンジェリンが悪だと決めつける事こそが悪であるうに！」

そう叫ぶ真久部に、神多羅木先生はうんざりといった様に頭を振った。

まあ彼がそんな表情をするのもわかる。俺だっとうんざりだから。

真久部儀瑠。中等部に入ってすぐに知り合った彼は、なんとか、一言でいうならば変人だった。

日本人だというのに髪は綺麗な金髪。瞳は赤。生まれた当初は非常に驚かれたそう。彼のご両親が。

父は母の浮気を疑い、母は息子の病気を疑った。病院にて検査（DNA検査もされたとか）を受けてもご両親の混乱は収まらず、結局『ギル』なんて西洋風の名前まで付けられた。

まあそれだけならいい。日本人という枠組みを取っ払えば真久部は見た目もいい方（というか一級の美少年に分類されるだろう）で、変人と呼ばれることなどなかっただろう。

では何故彼が変人の名を付けられたか。その一端が彼の一人称であり、彼の言動であり、彼の持論である。

そして今日もまた、真久部は飽きもせず持論を展開している。夜間の見回りということで学園長に組まされた神多羅木先生に。

と、そこで傍観してきた俺に神多羅木先生が近づいてきた。そのまま何やら耳打ち。

「俺は疲れた。後は頼んでいいか、宮城」

「ちょー！？ 何故そこで俺に!？」

「シスター・シャークティから聞いている。子供の世話は得意なのだろう？ 俺にはアイツの世話は無理だ。むしろ眉間をぶち抜いてやりたい」

「いやいやいや。俺にも無理ですって。そりゃ施設じゃマクスウェルやらハインケルやらの世話をさせられてますけど、アイツは無理。今も神父様のセリフが出てきそうなのを我慢してるんですから」

「ああ、化け物どもと異教徒どもはぶっ殺せだったか。あの方は過激だからな」

神多羅木先生の言う通り、神父様は過激だ。今日も銃剣を磨ハコトメいてたし。

まあ尊敬しているけどね。あの人に引き取られたから今の俺がいるわけだし、いつかあの人のようになりたいと思っている。

「フリークス」
「だけど、いやだからこそ真久部をぶっ殺したい。よりもよって化物共を庇うなんて。あいつも一応異教徒だし、ヤっちまっても問題ない気もする。少なくとも神父様は許してくれる気がする。」

「だが俺の方も限界でな。時間交代で行こう。少しだけでいいからアイツの暴論から解放されたいんだ」

「うー。俺が銃剣出したら止めてくださいよ？ ここから追い出されるなんて神父様に迷惑かけるの嫌ですし」

「心配するな。あいつの味方はいないし、宮城の味方は大勢いる。隠蔽工作は楽だ」

「ちよつ!？」

それが立派な魔法使いを目指す者のセリフですか!？ 俺はいけど。神の首切り包丁目指してる身だし。

しかしその言葉は出なかった。それよりも先に、真久部がコソコソ話している俺たちに気づき振り向いたから。

「おい！ 我の言葉を聞いていたのだろうな！」

「すまんな真久部。なんでも俺より宮城の方が聞きたいそうだ。お前に自ら聞きに行けと俺は言っていたのだが」

……俺は生贄に捧げられた。 エイメン A M E N .

「ふん。雑種だとばかり思っていたが、なかなか見所のある奴ではないか」

これが無ければなあと思う。真久部はどういうわけか自分を我と呼び、他人を雑種呼ばわりする。そんな訳で顔はいいのにモテない。実力はあるのに認められない。基本、変人だと思われてる訳だ。

まあ……仕方がないか。こんなんでも一応同僚だ。侵入者が出たとき話を聞かなかったせいとかで見捨てられても嫌だし。逆の立場なら俺は見捨てるけど。

「では雑種よ。貴様が此度の桜通りの吸血鬼事件についてどう思っているか、疾く聞かせよ」

「あー、桜通りの、なあ」

桜通りの吸血鬼事件。麻帆良に封じられた真祖の吸血鬼・闇の福音ジェル音が、呪いからの解放を求めて女子生徒の血を啜り、あまつさえ教師として麻帆良に来た『英雄の息子』ネギ・スプリングフィールドを襲った一連の事件。結局闇の福音はネギに打倒されたそうだが……

「はつきり言つて茶番だよな。倒して授業に出席させるようにした？ アホらしい。化物共フリークスは殲滅するべきだろ」

神父様もきつとそう言うはず。だから銃剣を磨いていたのだろう。ま、シスター・シャークティがどう思っているかは知らないが。まさに神に仕える者としての模範解答。しかし俺の回答は真久部の望んだものではなかったのだから、奴の表情が歪んだ。まあコイツの考え方は知っているし。

「所詮は雑種か。そもそもエヴァンジェリンは悪ではない」

「はあ？」

「いったい何言っちゃってんの？」

「アレに懸けられた罪人の証、すなわち六百万ドルにもなる賞金は解除されている。ならばアレの罪は洗い流されたとするのが妥当である」

「妥当じゃねえよ。奴には殺しに殺した年月がある。それが十五年ぼっちの御勤めで免除されるってんならこの世に死刑はいらねえだろ」

「そこからして貴様は雑種なのだ、雑種。だいたいアレの殺してき

たとされる者どもはアレが吸血鬼だという理由のみで襲ってきた者ばかり。つまりは正当防衛だ」

「……なにそれ？ どこ情報よ？」

まったく聞いたことのないことだったので神多羅木先生の方を見るが彼も首を横に振る。ということは魔法先生たちも知らない情報か、それが全くの妄想かだ。真久部はこんな話し方でも中学生だし、妄想って線のほうが濃厚だろう。

「情報の出どころなどどうでもいいだろう」

……やっぱ妄想だな。まあ変人の話だし。

「重要なのは、だ。そんな不当に賞金を懸けられ、三年という刑期のはずが十五年経った今も不当に麻帆良に拘束され続けているエヴァンジェリンが、己の力で呪いを解呪しようとしたことを責める道理は存在しないということだ！」

「三年つてのもどこ情報だよ。妄想垂れ流しすぎだろ」

イラつきを通り越して心配になってきた。コイツ、眷属にでもされてるんじゃない？

「だというのに貴様らはアレを吸血鬼というだけで悪だと断じる。まったくもって醜悪だ。全てはメガロメセンブリア辺りの陰謀だろうというのに、貴様らは情報に踊らされるばかりでエヴァンジェリンのことを知らずともしない。雑種、貴様は考えたことがあるか！？ エヴァンジェリンを解放してやるべきだとは思わないのか！！」

「思わねーよ。アホか」

真っ向から言い切つてやる。神多羅木先生はといえばこめかみを抑えていた。頭痛でもしてるんだらう。コイツのアホ妄想のせいで

「ふん！ 貴様も思考を放棄するか。やはり雑種だな！」

「なら聞くがよ。テメエは考えてるつてのか？」

「当然だらうが」

「へえ」

誰が見ても考えナシなのはコイツの方だと思うが。まあなんだ。少しくらいは付き合つてやるけどさ。

「ある国で、まあ例としてアメリカとでもするか。アメリカで大量殺人が起こつた。犠牲者は分かっているだけで三百人以上」

「いきなり何の話だ？」

「まあ聞けよ。で、その犠牲者全てが無残な死体で発見された。老若男女問わず、だ。アメリカ中を騒然とさせたその事件は、犯人が捕まることで幕を閉じた。警察、FBI、インターポールが犯人と断定したその男は、裁判で有罪と認められ千年を越える刑期を言い渡され獄に繋がれた。さて、真久部君の感想は？」

「む？ 我としては甘いと思うぞ？ 惨殺された三百人の無念はその程度では晴れんだらう。その犯人は苦しみぬいた末に殺すべきであらう」

「その犯人が冤罪を主張していたら？」

「そんなものは虚言であろう。各関係機関が犯人と断定したのであるろう？」

「ではその犯人を擁護する者が現れた。彼の談ではその犯人の犯行は全て正当防衛だとか。各関係機関はその犯人を犯罪者とするために陰謀を持ち寄り、報道機関も犯人を凶悪な人物とするために犠牲者の数を水増しし事件をより凄惨なものとして報道。裁判所までもがそれに共謀していると。さて真久部君の感想は？」

「莫迦らしい。陰謀論もほどほどにせよ」

そこまで来て俺たちの話を黙って聞いていた神多羅木先生が噴き出した。どうやら我慢の限界だったらしい。まあ気持ち分かるが。

「なんだ？ 何が可笑しい？」

その疑問に答えたのは神多羅木先生だ。

「あのなあ真久部。今の話の犯人のところをエヴァンジェリンに置き換えてみる」

と、それを聞いて考え込みだした真久部だったが見る見るうちにその顔が赤く染まっていく。それはまあ、羞恥よりも怒りだろうなあと思う。

「世界に何人犯罪者がいると思う？ そのうち冤罪を訴えている者は？ その全員についてお前は陰謀が裏にあると疑っているわけか

？ ありえねえだろ」

反論される前に俺はつなげる。どうせこの程度でこの変人が考えを変えるとは思えないが。

「そもそも闇の福音は冤罪だとも不当な扱いだとも言っていないんだぜ？ それどころか『悪の魔法使い』を自称してると来てる。なんでそんな奴を気遣う必要がある？ 自称悪人の過去を考えてやる必要がある？ 闇の福音を解放するべきなんて考えは、『正しいこと』でも『すべきこと』でもねえだろ。ただの『肩入れ』だ」

「俺も宮城の意見に賛成だな。学園長や高畑君は彼女に信用しているようだが、正直肩入れに見えてならない。お前もだ、真久部。まあ彼女は見た目は可憐だから分らないでもないが」

まあねえ。と俺も笑う。

見た目だけなら闇の福音もとびきりの美少女だ。保護欲を誘うような。真久部があえて綺麗な存在だと思いたがることもわからない。もっとも俺にとっては殲滅する対象でしかないが。

さて、話は終わりだ。そろそろ見回りを再開しよう。そう俺と神多羅木先生は歩を進めるが、

しかしやはりというべきか、真久部は尚も声を荒げてきた。

「所詮は雑種だな！」

それはもう聞き飽きた。大体俺たちが雑種ならお前はなんなんだよ。血統書付きのチワワちゃんか？ だったらゲージでプルプル震

えてろ。

「なあ真久部。別に肩入れすんなどは言わねえよ。犯罪行為を行わない限り、俺だってあいつに敵対するつもりもない。まあ今回はスレスレだったか」

「だけどな、と続ける。」

「お前の語った脳内妄想が本当だったとしても、それが分かる奴なんていないんだよ。数百年の記憶をすべて盗み見て記録するわけにもいかねえだろうしな。と、いうわけで、エヴァンジェリンが本当は、なんてのは神様にでも任せようぜ？」

「AMENと十字を切る。」

「もしも真久部と話が本当だったとしても、それが分かるのは世界を俯瞰する神様くらいの物だろう。」

「もしくはこの世界が物語の中だったとして、それによって人物設定まで知ることの出来る読者とか。」

「まあそんな仮定はありえないだろうけどな。俺たちはこうやって生きているのだから」

「ん？ 何か言ったか？」

「いいえ、なんでもありませんよ。それよりちやちやと終わらせちゃいましょう。明日も早いんですよ」

「見回りをちやちやっとというのは駄目だけどな。まあしかし、少しくらいは考慮しようか」

そう笑う神多羅木先生と歩き出す。
ギャンギャン吠える真久部は、まあ無視する方向で。

(後書き)

プルプル。ボク、悪い作者じゃないよ)、。、)。
だから怒らんといてね？

さて、ネギまアンチものでは最早テンプレと化している立派な魔法使い(笑)ですが、ぶっちゃけ彼らも頑張ってると思うのですよ。エヴァへの扱いだって概ね妥当な物でしょう。誰だって世界的な指名手配を受けていた史上最高額の賞金首に対し、まっとうな扱いをしようなんて思いくいでしょ。

というかMMの陰謀を疑えとか、原作知識があるからこそ言える事であって、その世界の住人には厳しすぎやしませんかね？

現実でも、大量殺人犯が報道されて、そいつが実は善人だったんじゃない？なんて、意見出した瞬間白い目で見られるのは確かでしょう。そんなわけでMMに対して悪く言うのはアリでも、それに踊らされた被害者でしかない魔法先生ズに対するアンチにはちよいと眉を顰めてしまう2Pカラーでした。

それに。。。ねえ。立派な魔法使いを目指してる人たちはMMに洗脳に近い教育受けて時に戦争での駒にまでされてるわけですし。。。ねえ

ま、とことんまで腹黒くしたぬらりひょんをぶっ潰すアンチものとかなら大好物なんですけどねww

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4666u/>

モブキャラ君とオリ主君

2011年7月2日09時32分発行